

複文における従属節の構文的職能と形態的機能

—様態修飾の〔～Vように〕節のアスペクト性に関する一考察—

于 日 平

Analysis of the Affecting from the Functionality of the Clause to the V-Form of the Predicates in a Complex Sentence

—The Functionality of Predicate Verb in a Manner Modifying Clause [～Vように]—

YU Riping

文章摘要 複句表义分二个层次完成，一个是句子层次，依据逻辑意义关系；一个是短句层次，体现为由词汇·句子结构等语法条件形成的短句特性，而动态地连接二个层次间的是具有不同句子特性的“从句—主句”组合时的相互关系方式。运用二层次分析法，就可以综合分析复句的“静态”时典型用法和“动态”时功能变化过程，可以以+-方式勾画出形成短句特性的词汇·句子结构等各种语法条件如何综合作用并动态地形成复句中各种用法的。

本研究分析内容如下：1) 样态修饰的〔～Vように〕从句，为了维持逻辑意义上的与主句的“同时性”，从句中的词汇·句子结构等各种语法条件是如何综合作用的；2) 详细分析受“同时性”制约，从句中的谓动词的时·体态发挥着什么样的“体态”语法功能。最后，本文提出采用二层次分析法，能综合“静态”和“动态”两个方面，以“从句—主句”相互关系方式动态地解释复句。同时，本文尝试把这种分析法运用到其他复句的从句中，认为通过对从句谓动词的时·体态功能特征分析，可以描绘出各种复句的从句之间、以及进一步描绘出“从句—主句”之间存在着逻辑意义和功能变化关系上的某种关联性。

关键词 复句的二层次分析法 表意上的“静态”与“动态”〔～Vように〕
从句中谓动词形态功能 不同特性短句的组合方式 从句的谓动词功能与逻辑意义

1. はじめに

〔～Vように〕従属節が比喻・様態や結果目的・願望などを表すことができるが、これまでは、同じく目的を表す〔～Vように〕文と〔～ために〕文を区別することや、様態修飾から結果目的へと変化する〔～Vように〕従属節の機能連続性などを、従属節と主文との発生時間前後性の有無や主文の述語動詞のコントロール性の有無などに重点が置かれている研究が多い。しかし、〔～Vように〕文を中心に、プロトタイプ用法間の機能変化を、A) 複文では、従属節と主文がどのように働きかけあいながら、プロトタイプ用法として特定された意味表出を決めているのか、B) 従属節と主文の相関関係形成に、語彙・構文的な諸条件がどのように関わり、プロトタイプ用法間の機能変化プロセスをどのように総合的に作り出していくのか、という原点としての——動的・静的を総合した分析視点が欠けているように思われる。その結果、〔～Vように〕文の機能変化を動的に捉えて解明することができず、また、プロトタイプ用法の性格や特徴も細かく明らかにすることができないでいる。

〔～Vように〕複文では、文レベルにおいて従属節と主文の論理的な時間関係によってその具体的な意味表出が決められる一方で、その時間関係形成の仕方もまた語彙・構文的条件によって特徴づけられた従属節と主文の相関関係の仕方に応じて常に動的に動いているものである。したがって、論理的な時間関係に基づきながら、語彙・構文的な諸条件によって特徴づけられる従属節と主文の相関関係は、常に相補的で可変的な関係にあり、それがプロトタイプ用法になる〔～Vように〕文の表現特徴を示すと同時に、プロトタイプ用法間の機能変化をプロセス的に示すものでもある。本研究では、様態修飾の〔～Vように〕従属節を中心に、従属節の構文的職能と述語動詞の形態的機能という角度から、論理的な時間関係に基づいて特徴づけられたプロトタイプ用法と、語彙・構

文的に特徴づけられる構文的職能の変化プロセスを解明してみたい。

主文を様態修飾する〔～Vように〕従属節は、論理的には主文との「同時性」を義務付けられるもので、職能として主文の動作やデキゴトなどを「動的様態・性格」という側面から修飾するものである。次にあげる例①②③では、述語動詞に異なる活用形が使われているが、連用修飾的に働くという構文的職能においては変わらない。

①あたりは、深い森に囲まれていて、死んだように静かである。

②彼はモーツアルトの素晴らしさについて物静かにしゃべった。彼は田舎の人々が山道について熟知しているように、モーツアルトの音楽の素晴らしさを熟知していた。(ノルウェー)

③その総務部長の後を追うように、公子はやっと席を立ち、室を出ると、階段を降りて、表通りへ抜け、朝の開店直後の通りの向かい側の喫茶店へ飛び込んだ。(副社長)

以下、まず2では、様態修飾の〔～Vように〕従属節が主文との相関関係上「前後性」による結果目的・願望を表す動的な変化可能性を持ちながらも、いかに「同時性」を維持するのかを語彙・構文的に解明する。それから、3では具体的に様態修飾という職能限定を受けた〔～Vように〕節では、述語動詞にテンス・アスペクトの諸形態が使われていても、いかにテンス性をなくしてアスペクト的に働くようになったのかを説明する。最後に、4では〔～Vように〕従属節をもつ複文は、文レベルにおいて、性格の異なる従属節と主文が作り出す相関関係の仕方によって意味が特定されるものであり、節レベルにおいて、その相関関係の仕方を決めるべく、従属節と主文に語彙・文法的諸条件が関わっていくものであると二次元分析法を説明し、その二次元を動的に結び付ける〔従属節⇔主文〕の相関関係の機能を解明する。そして、このような〔動的・静的〕という総合的視点から従属節全体を考えれば、異なる複文の従属

節間に〔従属節⇔主文〕の相関関係に基づく機能関連性が見いだせるのではないかと主張したい。

2. 論理的な時間関係に基づく様態修飾の〔～Vヨウニ〕修飾節について

複文は、文レベルにおいて従属節と主文の論理的関係によってその具体的な意味表出が決められる一方で、その相関関係形成の仕方がまた語彙・構文的条件によって特徴づけられた従属節と主文の性格に応じて常に動的に動いているものである。次は、様態修飾の〔～ように〕従属節は論理的に主文との「同時性」制限を受けていることを前提に、その同時性維持のために語彙・構文的な諸条件がいかに総合的に働いているのかを、「前後性」との相異を視野に入れながら説明していきたい。

2.1. 〔～Vように〕従属節の機能連続性——同時か前後かを区別する語彙・構文的条件

前田1992では、「主節動作に同時に付随する事態を差し出す『様態』のヨウニが、主節動作から時間的に後に生じる結果的な事態、いわば『結果的な様態』を表す場合に、『目的』の意味を表すこと」になる(p.102)と指摘した上、このような発生時間のずれをもたらず要素として、様態の「ように」節が主文と「関連のない動作である」ことと、話者のコントロール不可能な「非意志的・状態的述語」を使うこと(p.107～108)などを挙げている。しかし、どうして「結果的な状態」になれば主文との前後性が生ずるようになるのか、主文と関連のない動作とは意味・構文的にどんなことを指すのか、については具体的な分析が見られなかった。

于日平2003では、複文は、〔従属節対主文〕¹という相関関係によって構成されているものであると指摘した上で、従属節は主文と異なる動作

主がするものであるから、「コントロールできない」ことになるのが当然で、「前後性」を生じさせたのは「非意志的・状態的述語」に直接に関係がないと述べている。

④クラス全員が時間通りに来る／来られるように、車の手配をすでにしておいた。

[～ように] 従属節が果たす様態修飾と結果目的・願望の機能連続性を「同時性—前後性」の角度から意味・構文的に分析すれば、従属節が主文と切り離されて独立した内容となっているか否か、主文の働きかけを受けて主文の後になって発生するか否か、という二つが最も重要な文法的条件であろう。その機能連続性を語彙・構文的に分析すれば、次のような対立関係をしているように思う。

I) 結果目的・願望になる従属節内容は、意味的には主文と異なる動作主がする独立したデキゴトであり、構文的には[主—述]構造を持っているのが多い⇔様態修飾になる従属節内容は意味的にも構文的にも主文内容に依存していること、

II) 発生上の時間関係において、結果目的・願望の従属節内容は主文より以後に発生することを可能にするものに限り、そして、その従属節は主文の意図的な働きかけを受けて発生すること⇔従属節内容は主文より以後に発生することがありえず、また、主文の意図的な働きかけを受けて生ずる意味合いがまったくないこと。

それでは、なぜ様態修飾の[～Vように]従属節述語に「タ形」や「テイタ形」が使われていても、主文より以前に発生するデキゴトと解釈されないのだろうか。それは、「様」という語彙の意味によって様態

1 于日平2003では、さらに従属節と主文がそれぞれまずまとまったデキゴトを表し、そのデキゴト性質が互いに影響しあって複文全体の意味を決めていると述べて、構文的に「従属節≒主文」という概念が簡単に説明されている。

修飾機能に制限されているからだと考えざるを得ない。つまり、本来「様」という語彙の意味が様態を表すもので、それによって特徴付けられた〔～ように〕従属節が主文を同時に様態修飾するのが基本的な用法であったが、結果目的・願望になれたのは従属節が構文的に〔主―述〕構造を持つことで主文と切り離されて独立した内容となっており、そして、主文の意図的な働きかけを受けて結果様態として以後に発生することと解釈できるようになったからであろう²。言い換えれば、〔～Vように〕複文に観察される「同時―前後」の時間関係の相異は、〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方に密接に関わっており、語彙・構文的に特徴づけられた従属節と主文の性格——従属節内容のまとまり性や独立性、主文の意図的な働きかけなど——に由来するのである。

このように、〔～ように〕従属節の機能連続性を〔動的・静的〕の総合的角度から分析すれば、次のように、節レベルにおいて「意味的」と「構文的」に、文レベルにおいて〔従属節⇔主文〕との相関関係的に説明することができよう。

語彙・意味的に＝「さま」は本来様態を表すものであり、「さま」によって構成される修飾節は基本的に主文を同時に様態修飾する性質を持つものである。ところが、日本語表現では、意味的に主文に依存しない内容形成に伴って様態修飾から結果目的様態や願望へと機能拡張されるようになった。

語彙・構文的に＝様態修飾を基本的な用法とする〔～Vように〕従属節が語彙・構文的に主文内容に依存し、内容的にまとまり性や独立性を持たないことが必要となる。言い換えれば、〔～Vように〕従属節が結

² 「様」がつく従属節は、語彙的な意味制限によって主文より以前に発生するデキゴトを表すことができないことになるを考える。そのため、〔～Vように〕従属節は「同時―前後」という機能変化ができ、これは、時間の前後関係を基本的な特徴として因果関係から目的関係へと機能変化をする〔～Vために〕従属節とは異なる。

果目的様態や願望を表すためには、内容的に主文と切り離されてまとまりのあるものとなり、構文的に〔主一述〕構造を持つ独立文になる必要があるのである。

文レベルにおける相関関係の仕方＝複文レベルでは、論理的に様態修飾は同時性を特徴とし、結果目的様態・願望は前後性を特徴とする。したがって、様態修飾の〔～Vように〕文では、同時性を特徴とする〔従属節⇔主文〕の相関関係維持に「語彙的」と「構文的」諸条件が総合的に働いているのである。このような語彙・構文的な諸条件によって特徴づけられた相関関係の仕方は、様態修飾のプロトタイプ用法を決定する一方で、結果目的状態や願望へと機能変化プロセスを動的に解明してくれてもいる³。

2.2. 様態修飾をする〔～Vように〕従属節の語彙・構文的な諸条件
様態修飾の〔～Vように〕従属節は語彙・構文的に次のように条件付けられている。

A) 様態修飾が明示される構文

様態修飾の〔～Vように〕従属節に動詞の「タ形・テイル形・テイタ形」はもちろん、意志動詞の「ル形」が使われているとしても、節中に修飾機能を示す副詞「あたかも」や「まるで」などがあったり、例挙を示す不定詞「～か」や「など」「でも」などがあれば、主文を同時に様態修飾するとは解釈されなくなる。

⑤ 蛍は何か思いついたようにふと羽を広げ、その次の瞬間には手すりを越えて淡い闇の中に浮かんでいた。それはまるで失われた時間を取

³ 機能の連続と区別を説明する時には、現在〔0-1〕式分析法・プロトタイプ式分析法がよく使われているが、機能変化を動的に分析する場合は、移行途中の用法や両用法にまたがる用法は必ず存在すると思う。

り戻そうとするかのように、給水塔のわきで素早く弧を描いた。(ノルウェー)

B) 主文と異なる主体（動作主を含めて）を持たない場合——主文の主体への依存

[～Vように] 従属節が主文と異なる主体を持ち、主文から独立した内容を表さないと、構文的に主文と動作主を共有し内容に依存するものとなり、主文を同時的に様態修飾すると解釈されやすくなる。中で、単なる動作概念で様態修飾をするようなものもある(例⑦)。

⑥その総務部長の後を追うように、公子はやっと席を立ち、室を出ると、階段を降りて、表通りへ抜け、朝の開店直後の通りの向かい側の喫茶店へ飛び込んだ。(副社長)

⑦その男は柱時計を捧げるように持ってぶるんぶるんと音をさせながら歩いている。

C) 連体修飾節のデキゴトが主文と同質のものを表す場合——主文の内容への依存

[～Vように] 従属節が意味的に「主文内容に依存する」ことになる、様態修飾として機能すると解釈すべきであろう。「主文内容への依存」は、「動作内容やデキゴト内容が同質なものになる」と幅広く捉えて、「主文内容に依存する意味的な関連性」があれば、主文を様態修飾しているものと解釈されやすくなると理解する。

⑧萱鼠(かやねずみ)が萱の葉の中で巣を作るように、ここの人も森や草原に囲まれる所に部屋を建てるのを好むらしい。

例⑧では、[～Vように] 従属節は[主—述]構造を有するので、異なる動作主がするものであるが、「巣を作る」と「部屋を建てる」とは同質の動作或いは同質のデキゴトを表すため、主文の人間動作を比喩的に様態修飾するものとふつう解釈されるのではなからうか。このような

主文内容に対する依存性に「強一弱」の差が存在するが、それによって意味的に様態修飾から結果目的・願望へと機能変化を可能にしているのである。

D) 主文の意志的動作が目的実現を持つ働きかけ性を持たない場合——
非働きかけ性

主文に状態動詞や非意志性自動詞が使われる時はもちろんのこと、意志動詞であっても目的実現を持つ働きかけ性を明確に持たないと、[～Vように] 従属節が時間的に主文と前後性を生じて結果目的・願望へと機能拡張をすることができない。つまり、主文の動作主が従属節に対して「異なる主体が望まれる動作をするように」「異なる主体がある状態に達するように」と意図的に働きかけていく必要があるのである。

⑨学生が文章の意味を正しく理解できるように、先生は単語の意味だけでなく文構造や段落の構成なども丁寧に説明している。

⑨' ? 学生が文章の意味を正しく理解できるように、先生は一人で静かに本を読んでいる。

例⑨'の「一人で静かに本を読む」ことは意志的行為であっても、「説明」のようにふつう何かを実現するための意図性を持つという働きかけ性が非常に弱いため、結果目的や願望と解釈されにくくなるのではないかと考える。このように、主文が明確に働きかけ性を持たない内容となると、[主一述] 構造を持つ [～Vように] 節であっても、主文との前後性を持つ独立したデキゴトを表すことが難しくなり、様態修飾として解釈されやすくなるのである。

2. 3. 同時に機能限定された [～Vタ形ように] の働きについて
——因果や時表現との比較

2. 1. で [主一述] 構造を持つ [～Vように] 従属節は述語に意志

動詞の「ル形」が使われると、主文の働きかけを受けて前後性が生じ、結果目的様態や願望などを表すことが可能になると述べた。それでは、なぜ「タ形」が使われていても、主文より以前になるとの前後性が生まれず、依然として様態修飾するのだろうか。それは「様」の語彙の意味が様態修飾という機能発揮に限定されているからだと説明するしかないと思う。つまり、[様態修飾＝同時性]という複文レベルの論理的関係によって決められた時間関係に基づいて、主文より以前に発生したデキゴトであっても、主文を結果状態的に様態修飾しているのである。

⑩ハミツさんは——多くの僕の知り合いがそうしたように——人生のある段階が来ると、ふと思いついたように自分の生命を絶った。(ノルウェー)

例⑩の[～Vタ形ように]従属節が主文を同時的に様態修飾するものという機能限定を受けるため、主文より「以前に発生する」という「タ形」のテンス性をなくして結果様態としてアスペクト的な働きに変わったのであろう。これは、時連体修飾節や因果関係表現の従属節が主文より「以前」を表すというテンス性を持っているのと著しく異なっている。

⑪郷里に帰る時、旧友に会った。

⇒主文のデキゴトより以後

⑫郷里に帰ったとき、旧友に会った。

⇒主文のデキゴトより以前⁴

⑬雨が降るので、運動会が中止になった。

⇒従属節が以後に発生すること

⑭雨が降ったので、運動会が中止になった。

⇒従属節が以前に発生したこと

⁴ 連体修飾節のテンス性については、高橋（1994）と工藤（1995）とで詳しく論じられているので、ご参照ください。

このように、様態修飾機能の特徴づけた「同時性」によって、[～Vように] 従属節述語に使われる動詞の「ル形・タ形」がテンス性を失い、アスペクト的に働くようになったのである。

3. 様態修飾の [～Vヨウニ] 節述語に使われる動詞のアスペクト性について

様態修飾の [～Vように] 従属節では、動詞の「ル・タ・テイル・テイタ」形がいずれも使われているが、主文との「同時性」という制約を受けてテンス性を失い、それぞれがアスペクト的に機能していることになる。以下の3.1. では、[～スルように] と [～シタように] の相違について、3.2. では、[～シテイルように] と [～シテイタように] の相違について、3.3. では、四つの形が果たすアスペクト的な機能をどのような相互補完関係を形成しているのかについて例を挙げて説明する。

3.1. 様態修飾の [～スルように] 形と [～シタように] 形について

主文との同時性を義務付けられる様態修飾の [～Vように] 従属節は、主文より以前も以後も表すことができなくなるため、[スル] 形と [シタ] 形が相対テンスの対立を示す機能を失い、それらの機能の一部——潜在的に持つアスペクト的な機能を果たすようになるのである。

⑥その総務部長の後を追うように、公子はやっと席を立ち、室を出ると、階段を降りて、表通りへ抜け、朝の開店直後の通りの向かい側の喫茶店へ飛び込んだ。(副社長)

⑬筋肉質で、それほど背の高くない宏次は、いつも何かを考えるように、首を右側にすこし傾け、顔を引いて、大股にゆっくりと歩いていた。(副社長)

⑩彼女はすごく熱心に、食い入るようにその映画を見ていた。(ノルウェー)

⑪それに対して、三人の日本人客は、バラバラに入ってきて、バラバラに出ていったのだが、申し合わせたように、ギリオンや叔父を見るなり、何かしら落ち着きをなくした。(暗黒)

例⑥は「追いかける」に置き換えができるように、動作の始発状態を表す用法であり、例⑮は「いつも～ル形」が示すように動作の繰り返しや習慣による修飾用法で、例⑯は、「食い入る」という動作概念によって主文が様態修飾されていると言えよう。それに対して、「タ形」をとる例⑰では、「申し合わせる」動作が「～落ち着きをなくす」より以前に発生したというテンス性がなくなり、結果状態で主文を修飾している用法であると解釈されよう。このように、同時性という枠組みの中で、[～Vように] 従属節述語の動詞「ル形」は「動作始発状態」「動作の習慣状態」「動作の概念的状態」と、「タ形」は「動作・作用の結果状態」というふうそれぞれアスペクト的に働いているのである。

様態修飾に「ル形」か「タ形」かが使われることによって、アスペクトのどの側面状態に視点を置いているかという違いが感じられるが、その選択は文法的というよりも意味的または表現習慣的に制限を受けることが多いように思われる。例えば、次の例⑱' が不自然になるのは、結果状態による様態修飾の仕方が意味・習慣的に考えられにくいのではないだろうか。

⑱片田の怒りを慰めるように／慰めているように、公子は穏やかな口調で言った。(副社長) ⇒⇒始発状態修飾・進行状態修飾

⑱' ??片田の怒りを慰めたように／慰めていたように、公子は穏やかな口調で言った。⇒⇒結果状態修飾・過去の進行状態修飾

このように、述語に「ル・タ」形が使われてアスペクト的に機能する

様態修飾の〔～Vように〕従属節は、構文的に主文と同じ主体を持つことが多く、内容的に主文に依存しているのである。言い換えれば、従属節が表す内容が意味・構文的にまとまり性や独立性が欠けているものが多いのである⁵。

3.2. 様態修飾の〔～シテイルように〕形と〔～シテイタように〕形の違いについて

様態修飾の〔～Vように〕従属節では、動詞述語に〔～シテイル〕形と〔～シテイタ〕形が使われる例が非常に少ない。集めた約400例の中で、〔～シテイルように〕は8例、〔～シテイタように〕は5例しかない⁶。これは、主文を様態修飾するに当たり、「スル」形と「シタ」形が機能する動作始発状態・動作概念状態・動作結果状態によって行われるのが多く、動作持続状態や〔持続+変化〕状態を表す「シテイル」形と「シテイタ」形によって様態修飾ができる表現が少ないことを示していると考えられる。〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方から分析すると、「シテイル」の進行状態で様態修飾を受ける主文も持続する動作や状態になる場合が多く、〔～シテイタように〕用法では、主文の動作が行われるまでのある時間帯に動作や状態が持続していたことを表すものがほとんどで（過去のある時間帯に同時に持続して存するような用法は一例しかないが）、主文の動作が発生すると同時に変化が現れたという意味

5 様態修飾用法の中に〔～Vル形ようにして〕というのがある。主文と同じ動作主がその始発状態や動作概念状態を意図的に作り出すという感じが強い用法である。

①二人の外人は、あいかわらず顔を寄せ合うようにして会話をかわしているが、椅子席の客もふえているのでパー全体が騒がしくなっており、～。(暗黒の)

6 〔～Vように、主文〕のように従属節が主文を様態修飾するという構文ではなく、〔～シテイルように思われる〕や〔～シテイルように見える〕のように、思考や判断内容を表す用例が多い。それは様態修飾と引用や例挙の用法へとつながるもので、〔ように〕の全ての用法を対象にする研究ではじめて全体図を明らかにすることができるものとする。

①そこになにか適当な表現を見つけることができるんじゃないかと期待して見ているようにも見えた。(ノルウエー)

を含意するものが多いように思われる。

⑱彼はモーツアルトの素晴らしさについて物静かにしゃべった。彼は田舎の人々が山道について熟知しているように、モーツアルトの音楽の素晴らしさを熟知していた。(ノルウェー)

⑳なだれが止んだ。待ちうけていたように、男も一緒になって、女が体の砂をはらう手伝いをはじめた。(砂の女)

例⑱では、主文が表す「熟知」の状態が持続する間に、従属節の「熟知している」状態も続いている意味を表しているのであろう。それに対して、例⑳は、従属節の「待ち受ける」が主文動作「手伝いをはじめた」までに持続していた状態で、主文の動作開始をきっかけにして変化が生じたという意味を表していると言えよう。

3.3. 様態修飾の [～Vように] 従属節の動詞諸形態によるアスペクト的な機能補完関係

3.1. と3.2. の分析で判明されたように、様態修飾の [～Vように] 従属節の述語動詞に使われる [ル・タ・テイル・テイタ] の四形態が主文との同時性を前提して、それぞれ異なるアスペクト的な機能を果たして主文を様態修飾しているのである。各動詞形態が果たすアスペクト的な機能を次のようにまとめることができよう。

[～Vルように] 従属節は動作始発様態か習慣的な動作か動作概念様態を表し、[～Vタ形ように] 従属節は動作結果様態を表す。[～Vテイル形ように] 従属節は持続様態を表すが、動作動詞が変化動詞かによって動作進行様態か結果持続様態を表すことになり、[～Vテイタ形ように] 従属節は主文の出来事が発生するまでの持続様態を表すとともに、主文動作開始に伴って変化が生じるという意味合いを含む用法が多い。このように、様態修飾の [～Vように] 従属節は複文レベルにおい

て主文との同時性という論理的関係に義務付けられているので、述語動詞のテンス性がなくなり、そして、それを受けて動詞の四形態がそれぞれ相補的にアスペクト的な機能を果たすようになったのではないかと考えられる。

4. 従属節の構文的職能と形態的機能の相関性について

複文は従属節と主文から構成されるものであるから、まず〔従属節⇔主文〕がどんな相関関係の仕方では結ばれているのかによって枠組み的に構文的な意味関係が形成されることになる。このような文レベルの相関関係においては、論理的関係、とりわけ時間的關係が第一義的に働いているように思われる。そして、主文に対する従属節の構文的職能が決まれば、述語動詞の機能も大まかに決められてくるのである。2と3で様態修飾の〔～Vように〕従属節を分析したように、実際に従属節述語動詞のテンス・アスペクトの諸形態がどのように働くかは、まず複文レベルにおいて枠組み的に決められた構文的職能の限定を受けたのを前提するもので、そして、それを踏まえた上で、それぞれがアスペクト的に異なる形態的機能を発揮するのである。

また、一方では、〔～Vように〕従属節は常に職能変化をするものである。主文との同時性を維持し、様態修飾の構文的職能を発揮するために、「様」が示す「様態」という語彙の意味と、主文に依存する内容的意味と、〔主―述〕構造を持たない構文的条件などが総合的に働いて、従属節内容のまとまり性や独立性の欠乏という表現特徴を作り出している。さらに、主文から意図性を持つ働きかけを受けていないことも、〔従属節⇔主文〕の相関関係から見れば、様態修飾の機能維持に必要な条件となっている。

このように考えると、複文分析に当たり、文レベルにおいて働くもの

と、節レベルにおいて働くものが、つながっているながらも二つに分かれているように思われる。言い換えれば、文レベルにおいては、性格のできあがった従属節と主文が論理的関係に基づいて具体的な意味が表されるが、異なる従属節と主文の性格、それに基づいて結ばれる〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方は、従属節と主文を特徴づける語彙・構文的な諸条件が総合的に働いた結果であり、したがって、条件が変わるともなあって、相関関係の仕方も常に変化可能なプロセスにあり、その結果、文レベルの論理的関係や意味表出にも影響を与えているのである。このように、文レベルと節レベルに分かれながらも、語彙・構文的に条件付けられて相関関係形成を動的に特徴づけていくという二次元分析法をとってすれば、[Vように] 文のプロトタイプ用法を特徴的に説明できるだけでなく、プロトタイプ用法間の機能変化も動的に解明できるであろう。

さらに、このような二次元分析法を、異なる意味関係を結ぶ複文に適用させて見ると、一般言語学に属する論理的関係と、各複文の表現特徴ということにも関連してくるように思われる。ここでは、複文レベルにおいては、論理的関係に基づいて〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方や従属節の構文的職能が決定されているのを前提して、従属節述語に使われる動詞のテンス・アスペクト形の形態的機能の相異を分析し、それを通じて各種複文にある従属節の構文的職能と動詞述語の形態的機能の相関性を見てみたい。

4. 1. 複文レベルにおける従属節の構文的職能と形態的機能

複文は第一次元で従属節と主文から構成されるものである以上、両者がまず一まとまりとして互いに影響しあうはずである。その一まとまりとは、意味関係上のことでも、構文上のことでもあり、文法上のことで

もある。様態修飾の〔～Vように〕従属節を分析した通りに、まず複文レベルにおいては、論理的関係に基づいて従属節が主文を「同時に」様態修飾するという〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方が決められてくる。そして、このような主文に対する〔～Vように〕従属節の構文的職能に制限を受けるのを前提して、従属節という節レベルにおいては、述語動詞のテンス・アスペクト諸形態がそれぞれ異なるアスペクト的な機能を果たしていることになるのである。このような二次元分析法をとってすれば、複文を〔静態・動態〕の両方から説明することができるのではないかと考える。

複文には、様々な意味関係を結ぶ従属節と主文とがある。各種の従属節述語に使われる動詞のテンス・アスペクト形の形態的機能のあり方を分析すれば、複文ごとに異なる従属節の構文的職能と動詞述語の形態的機能の相関関係が分かり、さらに、それを視点にして複文形成の仕方にもどのように影響を与えていくのかも分るのではないかと考える。単文述語に使われる動詞のテンス・アスペクト形の形態的機能をプロトタイプとすれば、すでに多くの研究によって示されているように、因果関係複文にある従属節述語動詞のテンス・アスペクト形がテンス性もアスペクト性も基本的に完全な形で生かされていて用法が最も広く、それから、連体修飾節になると、テンス性の部分的喪失が現れ、さらに、連用修飾節へいくとだんだん狭く限定されるようになっていられる。このような二次元視点で各種複文の従属節述語動詞の「ル・タ・テイル・テイタ」形が果たす形態的機能の特徴を検討してみると、次のようなテンス・アスペクトの機能連続性が指摘できるのではないかと思う。

【単文述語⇒因果・条件などの複文の従属節述語⇒連体修飾節述語
⇒目的・願望などの複文の従属節述語⇒連用修飾節述語】

このような順序は、各種複文で具体的な意味表出を実現した時の従属

節と主文との時間関係を示しているが、それが複文レベルの論理的関係、とりわけ論理的関係を根本的に支える時間関係にどのように関わっているのか、また、日本語の各表現においては、従属節が語彙・構文的に特徴づけられながらどのように特徴的に表していくのか、については、複文レベルにおける時間関係と意味関係の相互作用の仕方を一般言語学と日本語学を総合して分析してみる必要があるだろう。

4. 2. 従属節の構文的職能と形態的機能の関連性

一方では、主文に対する従属節の構文的職能は決して不変なものではなく、語彙・構文的に特徴付けられた〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方がいかんによって常に変化するものである。

本研究で明らかにしたように、〔～Vように〕従属節の様態修飾機能維持は、「様」という語彙の意味と、従属節がまとまり性や独立性の欠乏という内容・構文的特徴が総合的に働いて実現した結果である。つまり、複文レベルにおいて論理的関係に基づいて具体的に実現されるプロトタイプ用法は、従属節と主文の語彙・構文的な諸条件によって特徴づけられた〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方によって決められてもいるということである。言い換えれば、従属節の構文的職能は従属節の形態的機能を決めていく一方で、従属節を特徴付ける語彙・構文的な諸条件も従属節の構文的職能を決めていく、という〔決め—決められ〕の相関関係にあるのである。

さらに、このような〔決め—決められ〕の相関関係は常に組み合わせ方に応じて動的に変化するものとなり、語彙・構文的に決められる枠組みの中で、従属節の職能変化をもたらしている。〔～ように〕従属節は、内容的に主文への依存性が高いか低いかを示す強弱度や、内容・構文的にどの程度でまとまり性や独立性を表しているか、さらに、それが主文

の意図的な働きかけを受ける程度の強弱度などの総合的な作用によって具体的に意味表出が実現されることになっているのである。その動的に変化するプロセスを作り出す〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方は〔～ように〕文の表現特徴だけでなく、具体的な意味を表しうる範囲をも示しているものでもある。

「様」の語彙的意味が様態を表すものであるが、現代日本語では、どんな様態を具体的に表しているのかによって引用・内容・例挙・様態・結果目的・願望など、いろいろな用法が生まれてきている。本研究では、様態修飾から結果目的・願望への機能変化は、様態を中心に「同時の様態」か「結果の様態・望まれる願望の様態」かで区別されていることを明らかにした。それを踏まえて、さらに〔～Vように〕従属節機能を調べていけば、ほかの用法も含めて「様態」で統一した説明を与えることができるのではないかと考えられよう。

5. まとめ

本研究で明らかにしたことをまとめると、次のようになると思う。

A：様態修飾をする〔～Vように〕従属節は、主文との同時性が義務付けられているため、その述語動詞に使われる「ル形」「タ形」がテンスの対立を示さなくなり、「テイル形」と「テイタ形」と同じようにアスペクト的に働くことになる。具体的には〔ル形〕は動作・作用の始発様態と運動の概念様態を、〔タ形〕は動作・作用の結果様態を、〔テイル形〕は動作・作用の進行様態と概念様態を、〔シテイタ形〕は主文の動作が開始するまでに存在していた持続様態と持続様態からの変化を、それぞれアスペクト的に表しているのである。

B：様態修飾の〔～Vように〕従属節と主文との時間同時性を保障するモメントとして、語彙的に「様」の働きによる場合もあれば、内容・

構文的に主に従属節が主文と異なる主体を持たず、まとまりのある独立した内容を作り出さないなどという主文内容への依存性、主文動作が意図的に従属節に働きかけていく意味合いを持たないという非働きかけ性、という総合的作用によって作り出される〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方が決め手となる。

C：複文分析にあたり、具体的な意味表出は文レベルと節レベルの二次元決定式にしたがって決められていることになる。文レベルにおいては、論理的関係に基づきながら確立した〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方によって決められる一方で、節レベルにおいては、〔従属節⇔主文〕の相関関係の仕方は常に従属節と主文の性格に影響を受けており、その性格決定に語彙・構文的な諸条件が総合的に関わっているのである。このように、二次元分析式をとれば、複文を〔静態・動態〕的に総合的に捉えて解明することができ、一般言語学と日本語学を有機的に結び付けて解明していくことができると考える。

本研究では、主に様態修飾をする〔～Vように〕従属節を中心に、述語に使われる動詞のテンス・アスペクト形がどのようにアスペクト的な機能を表すようになるのかを分析した。また、様態修飾から結果目的状態・願望へといかに職能変化が生ずるのかを説明するために、同時性と前後性を起因する語彙・構文的特徴を説明した。しかし、なぜ「様態」修飾から結果目的状態・願望用法へと機能拡張ができ、そのプロセスはどんなものであるのか、なぜ〔～Vタ形ように〕が因果関係表現のように主文より以前という機能が発揮できないのかについては、まだ不明な所があるように思う。また、「様」に対して訓読の「さま」と音読の「よう」の二通りがあるが、結果的に音読の「よう」が従属節作り、さらに文末用法へと文法化する道を歩んできている。これは、日本がどのように漢字文化を訓読みと音読みの両方で受け入れたのか、漢文表現が

日本語表現の構造確立や発展にどのように関わっているのか、という問題に深く関わり、日本語表現を史的に解明すべき問題がある。いずれも今後の課題にしたい。

参考文献：(五十音順)

- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現－』 ひつじ書店
- 高橋太郎 (1988) 「動詞 (その四)」 『教育国語』 91号
- (1994) 『動詞の研究・動詞の動詞らしさの発展と消失』 むぎ書房
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味・II』 くろしお出版
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 くろしお出版
- 前田直子 (1992) 「「目的」を表す従属節「～するように」の意味・用法－様態用法から結果目的用法へ－」 『日本語教育』 79号
- 于 日平 (1997) 「動作目的表現と結果目的表現－「タメニ」と「ヨウニ」を中心に－」 『筑波日本語研究』 第2号 筑波大学日本語研究室
- (2003) 「「ヨウニ」従属節についての一考察－様態修飾、目的・希望、伝達内容の用法を中心に」 『当代日本語研究－北原保雄博士業績記念論文集』 高等教育出版社

用例出典一覧表：

- 清水一行 『副社長』 光文社 井伏鱒二 『黒い雨』 村上春樹 『ノルウェーの森』 『砂の女』 『推理小説代表作選集1981』 講談社など